

「子どもと死」の問題

尾 上 明 子
菊 地 伸 二

§ はじめに

あらゆる宗教にとって「死」をどのように理解し、どのように解釈するかということは極めて重要な課題である。ある観点よりすれば、そもそも宗教とは目の前に横たわる身近な死者の存在をどのように受けとめていくかということから出発したと言ってもよいほどに「死」はその中心に位置するものである。

従って、キリスト教幼児教育、またはキリスト教保育がその宗教的要素を少しでも重視しようとするならば、当然のことながら「子どもと死」といったテーマは避けて通ることはできないように思われる。

とはいえ、「子どもと死」というテーマはそれ自体極めて大きなものである。この小論では、このテーマを扱っている、あるいはこのテーマに触れていると思われる絵本、童話、映画等を幾つかとりあげながら、この問題について吟味することにした。そこで次章では、「子どもと死」の問題をめぐる幾つかの基本的な事柄について確認することにした。

§ 「子どもと死」の問題をめぐる幾つかの事柄

「子どもと死」という問題をどのように提起し、どのように展開していくかということに関しては、レギーネ・シントラーの『希望への教育』が非常に参考になる。実際、彼女はその中の一章を「子どもと死」の問題に割いている¹⁾。そこでここではその叙述を絶えず念頭に置きながら、この問題をめぐる幾つかの基本的な事柄を提示してみることにしたい。

(1) 子どもを取り巻く「死」の環境

最近いろいろな意味で子どもの周囲から「死」という現象が遠ざかっているように思われる^②。例えば、医学の著しい進歩と衛生の改善などによって乳児の死亡率が格段に低くなった。かつてならば兄弟や姉妹の死に遭遇することもまれではなかったが、今ではそのようなことはほとんど見られなくなった。また、いわゆる核家族化の浸透により子どもが年配の人たち、つまり祖父母、あるいは曾祖父母などの死に身近で直面することが少なくなった。あるいはまた、自然環境の破壊が進行していく中で、虫、魚などを含めて小動物の死に出会うことも少なくなった。このようなことは間違いなく子どもの周囲から「死」のリアリティを希薄にしているということができよう。しかしその一方で、テレビ、マンガ、あるいはゲームなどを通してその登場人物が死んだり、あるいは殺したり殺されたりするといったことは、以前と同じように、あるいは以前よりももっと頻繁に見受けられるようになった。しかもそれはテレビゲームなどのようなバーチャル・リアリティとしてだけでなく、新聞やテレビの報道を通して報じられるように、まさしく現実、極めて残酷な「死」が子どもの世界に一つの脅威として入り込んできている。今日子どものうちから「死」のリアリティが希薄になってきたことと現実と考えられないような残酷な「死」が起こってきたことの間には何らかの相関関係が働いていると思われるが、今ここではそれ以上深く立ち入ることはしない。

(2) 「子どもと死」の問題を扱うことの難しさ (1)

従って、このような現状からすれば子どもが死をどのように受けとめていくかということとを考察することは、宗教教育を待たなくても、幼児教育、保育の上でも重要なテーマとなる筈である。

しかし一方で、このようなテーマにはその特有な難しさが伴う。というのも、「子どもと死」の問題というのは、シントラーのいうように、例えば我々が文字を教えたり、生活のルールを教えたりするのは同じようなわけにはいかないからである^③。というのも、我々が文字を教えたり、生活のルールを子どもに教える場合には、我々はすでにそれらのことを十分に知り理解して教えているからであり、いわば、自分たちは子どもよりも高いところから教えているからである。しかし「死」の問題に関しては、我々もそのことについて十分に知り理解しているわけではないし、また、自分自身のことから切り離して、いわば客観的に教えることは不可能だからである。つまり、ここでは「死」の問題を我々自身が果たして自分の問題として受けとめているかということが改めて問われるのであり、そこに「子どもと死」の問題を扱う上での第一の困難さがある。

(3) 「子どもと死」の問題を扱うことの難しさ (2)

第一の困難さはもうひとつのより大きな困難さを生む。それは我々が「死」そのものを遠ざけているということに起因する。シントラーはドイツ語を例にあげ、死を直接的に語ること、あるいは自分自身に関わることとして語ることの表現が非常に少ないことに注目し、我々が死から逃避していることを主張する⁽⁴⁾。

この事情は日本においても同様、あるいはそれ以上に強いのではないだろうか。自分たちにとっても遠い、あるいは遠ざけている「死」の問題であるから、自分たちよりも若い子どもと結びつけることは非常に難しいことでもあるし、特に「自分たちの」子どもの死ということになれば、それを考えるだけでも縁起ではないということになってしまうのである。

(4) 子どもといっしょに、どのように、死と共に生きることが可能か⁽⁵⁾

(2)(3)であげた理由から「子どもと死」の問題を扱う上ではその特有の難しさが伴ってくる。しかしそれにもかかわらず「子どもと死」の問題は重要な意味を持っていると思われる。確かに大人からすれば子どもはより若いので死からより遠い存在であると言える。この認識は一面では正しい。しかしこのことから子どもは大人のように、あるいは、大人ほどに、死のことを考えていないといえるかということ、事柄はそう簡単ではない。むしろ子どもは、大人が思っている以上に、「死」について考えていることがいろいろな書を通して報じられている⁽⁶⁾。まだ子どもだから「死」について考えることは不要であるとか、自らが考えたくないからという理由で「子どもと死」の問題をあげないというのは勝手すぎるように思われる。

むしろ我々は、大人であれ、子どもであれ、すべて自分のうちに自分の死を持っていることをはっきりと自覚すべきであり、この自覚に基づいて、「子どもと死」の問題をとりあげるべきである。そして我々が「死」を通して子どもも大人もその生を豊かにしていくことができるという確信を与えることこそが、キリスト教幼児教育、キリスト教保育の目指すところといってもよいかもしれない。そしてこの態度は、まさしく「子どもといっしょに、どのように、死と共に生きることが可能か」というシントラーの問いのうちに表現されている。

ところでこのような眼差しでいわゆる名作といわれる童話や絵本、あるいは映画を見ると、このテーマを扱っているものが少なからずあることに気づく。そこで次の章では、具体的にこれらの作品のうちから幾つかとりあげて「子どもと死」の問題について考察することにしたいが、その前に「子どもと死」という言葉の持つ多義性について簡単に触れておこう。

(5) 「子どもと死」の多義性について

ところで我々は、これまで「子どもと死」という言葉については特に問題視せずに話を進めてきたが、この言葉はそれを聞く者によって実にいろいろなニュアンス、イメージでとられる。

ある人は、この言葉によって、友人の死に遭遇している子どもをイメージするかもしれない。またある人は、動物の死を連想しているかもしれない。またある人は、兄弟や姉妹の死、さらには父や母の死、あるいは老人の死であるという可能性もある。

あるいは、自分の子どもの死に遭遇している親を思い浮かべる人もいるかもしれない。あるいは、自分自身の死に直面している子どもをイメージする人もいるかもしれない。

また死そのものについても、病気で長い間苦しんだ後の死かもしれないし、発作などによる急死かもしれないし、不慮の出来事によるアクシデント的な死かもしれないし、戦争のような出来事による死なのかもしれない。

その他あげたらきりがないが、このように「子どもと死」という言葉は多義的である。次章で扱う作品においてもそれを見る角度によってこの言葉はいろいろな意味を帯びてくるので、具体的にそのことに触れながら言及していくことにしたい。

§ 作品にみる「子どもと死」

(1) 戦争における「子どもと死」

～『火垂るの墓』『あゝころはフリードリヒがいた』『この子を残して』～

我々がまずここでとりあげる戦争、それはたとえそれを通して我々が生命の尊さ、命の尊厳を知ることができたとしても、あまりにも大きな代償となるのではないと思われるそのようなテーマである。またここには我々が、子どもたちに戦争における死、あるいは単に戦争そのものをどのように伝えるべきかという問題も含まれている。これは確かに非常に重要な問題であるが、今ここでこれ以上立ち入ることはしない。

さてここでとりあげる三つの作品、『火垂るの墓』、『あゝころはフリードリヒがいた』、『この子を残して』は基本的に第二次世界大戦の時代を扱っている点で共通している。また、戦争によって、あるいは戦争へと向かうプロセスの中で、それまで仲良く暮らしていた家族、あるいは家族間の関係がばらばらにくずれていく有様を描いている点でも共通している。究極的に我々の眼差しは、そのような家族、あるいは家族間の関係の解体を引き起こしたものへと向かっていくであろうが、これらの作品において、残された者、ばらばらにされた者がそれにもかかわらず必死に生きていこうとする点により重きが置かれてい

るのが印象的である。

*

そこでまず最初にとりあげるのは『火垂るの墓』である。「ほたるのはか」と読む。内容からすると『螢の墓』としてもよいのかもしれないが、ともかく戦争の炎、死体を燃やす炎を連想させる言葉である。原作は野坂昭如氏によるものであり、1968年に彼はこの作品により直木賞を受賞している。今日の子どもたちの目に触れるのは、この原作をもとに『アルプスの少女ハイジ』、『風の谷のナウシカ』、『天空の城ラピュタ』などのプロデュースを手掛けてきた高畑勲が脚本、監督を担当した劇場用アニメーション映画ではないだろうか。これも公開された1988年に日本アニメ大賞を受賞している。

ストーリーは1945年（昭和20年）6月、神戸を襲った大空襲で清太と節子の幼い兄妹が母親を失い、二人きりになってしまい、西宮の親戚の家に預けられて世話になるが、どうしてもなじめず、二人は池のほとりにある横穴で二人だけの生活を始める。最初は楽しく暮らしていたが、風変わりな生活をする二人に対して周囲の視線は決して温かくなく、栄養失調のためまず節子が、ついで清太が死んでいくという、実に悲しいものである。

映画の冒頭は14歳の少年清太の「昭和20年9月21日夜ぼくは死んだ」というモノローグから始まる。三宮駅構内で栄養失調のため死んだ清太の胸の中には「サクマ式ドロップ」の缶が入っていた。駅員がそれを無造作に投げると、そのふたがとれて中からは終戦日の直後にやはり栄養失調がもとで死んだ4歳の節子の骨がころがり出てきた。そこから場面は、昭和20年6月、まだ家族3人が仲良く暮らしていた神戸へと遡る。父親は海軍のため遠洋で従軍していたが、三人は仲良く暮らしていた。大空襲のその日、病弱の母より一足先に清太と節子が防空壕へと向かった。これが運命の別れ目となった。やがて清太は学校でやけどのため包帯でぐるぐる巻きにされた母親と面会することになる。彼は直感的に母の助かる見込みはほとんどないことを知った。しかしこのことを節子に伝えるわけにはいかない。かくしてつらく重い日々が始まる。

二人は親戚の家に預けられるが、このおばさんとうまくいかず、一種のいじめにあう。海軍の子どもはものをたくさんもっていると皮肉たっぷりに言われたり、もう不要だからと言って母親の着物を交換に出されたり、おばさんのうちの子どもと食べものの量を差別されたり…。最初は我慢していたがその程度があまりにもひどいので、二人はその家を出て池のほとりにある小さな横穴に住み始めることにする。そこは確かに住みやすいところではなかったが、誰からも嫌がらせを言われるわけでもなく、二人にとっては誠に心地よい場所であった。夜は真っ暗になるので、辺りから螢をつかまえてかやの中にいれて灯がわりに使う。

ある朝、節子は螢の死骸を集めて何やらしている様子。清太が尋ねると「お母ちゃんも

墓に入ってるやろ」と、ぼそっと答えながら彼女は螢の墓を作っていたのであった。節子はすでにあのおばさんから母の死を聞かされていたのであるが、そのことを兄に言うのではなく、このように過ごしてきた節子を見るにつけ、清太は思わず涙が溢れでるのであった。

生活の中で何かつらいことがあると、清太は「サクマ式ドロップ」を節子に与えては慰めあってきた。しかし生活はますます苦しくなっていく一方である。特にとなり組にも入っていないので配給もままならず、畑から作物を盗んだところを運悪く見つかって危ない目にあったりで、次第に二人の生活はみすぼらしくなり、栄養も不十分になり、衛生面もよくないので、節子が先にやられてしまう。終戦直後のことであった。「節子はそのまま目を覚まさなかった」という清太のセリフが悲しく響く。

戦争が終わり少しずつ疎開先から戻ってくる人々とは対照的にますますみじめになっていく清太は、節子を焼き、その骨をドロップ缶の中に大切にしまいこみ、いよいよ生活の当てもなく9月21日に死んでしまう。まさしくこの兄妹こそ一瞬光って消えてしまった螢だったのではないだろうかと思わせる作品である。

この作品において「子どもと死」の問題はいろいろな角度から見るができるが、特に、清太から見ると「母の死」「妹の死」「自分の死」ということになる。

「母の死」については妹がすでにそのことを聞いていて、螢の墓を作ることによって一種の弔いをしている場面が印象深い。兄として妹には絶対知らせてはならないという責任感、しかしそれは同時に悲しみの非共有ということなのであるが、妹が墓を作ることを見るにつけ、はじめて母の死というものに心から直面したのがこの場面だったのではないだろうか。

「妹の死」はこの映画の一番のクライマックスと言ってもよいかもしれない。母の死後、とにかく生きようとした二人、本当に妹のことを愛し、兄を慕い求めたこのような兄妹の別れの場面なのである。

「自分の死」、それはストーリーの語り手の死ということであり、あまり用いられない手法であるが、このことにより戦争の不条理さがかえって強調されるように思われる。「だから戦争はやめましょう」と安易に語ることは戒められるほどにそこには重いものが流れている。

*

次にとりあげるのは『あのころはフリードリヒがいた』という作品である。ハンス・ペーター・リヒター作（上田真而子訳）で岩波少年文庫から1977年に出版されている。原書は《Damals war es Friedrich》といい、1969年に出版されている⁷⁾。

同じアパートの一階上にぼくと同学年のフリードリヒ・シュナイダーが住んでいた。ともに1925年生まれであった。小学校入学の頃は両家族で写真を撮ったりしてとても仲良

く暮らしていたが、シュナイダー一家はユダヤ人であったため、ドイツの中では次第に生活がしにくくなっていく。ぼくの父親はそれまで失業していたが、ナチスの黨員になったためにすぐに仕事が見つかり、逆にシュナイダーさんは首になったりした。父親はシュナイダーさんにことが大きくなならないうちにドイツから出ることを勧めるが、自分はドイツ人であるからと言ってその気持ちに感謝しながらも踏み留まる。しかし、アパートの管理人からも嫌がらせや立ち退きをたびたび言われ、そんな中でフリードリヒの母親はユダヤ人撲滅を掲げる民衆たちにより死に追いやられてしまう。その後、フリードリヒとシュナイダーさんはラビ（ユダヤ人の教師）を匿ったことでアパートに住めなくなり、行方をくらますが、そんなあるときフリードリヒが戻ってきた。家族がばらばらになってしまったので、せめてひとつであることを感じたいという思いで、家族の写真を求め、入学の時一緒に撮った写真をもらいにやってきたのだ。ちょうど空襲のさなかだった。彼は防空壕に入れてくれと頼みこむが、管理人は断固としてそれをはねつけ、いっしょにいた我々も彼を匿ったら告げ口をすると脅され、何もできなかった。防空壕から出てみると、フリードリヒはその外で17歳の命を終えていた。アパートの管理人の「こういう死に方ができたのはこいつの幸せさ」という地獄の中からのような声が読後もしばらく響き続ける作品である。人権とか友情とかという言葉は強くはねつける冷酷な閉ざされた「死」がここには厳然として横たわっている。

*

もう一つ、日本がこの戦争で受けた原爆について触れたものを取りあげよう。それは長崎の原爆を扱った『この子を残して』である^⑧。

作者は原爆落下当時、長崎の大学で医学を教え、また医者として従事していた永井隆博士である。

自ら被爆者である彼は、戦後この出来事をしっかりと記憶しなければならない、風化させてはならないという思いの中で数々の作品を残した。その一つがこれである。この作品は、その後、木下恵介監督・脚本の下に映画化された。

映画は、教皇ヨハネ・パウロ2世が広島に来たときのスピーチで始まり、全体的にキリスト教的（カトリック的）雰囲気が出ている。作者一家はもちろんカトリックである。永井隆氏の二人の子ども、誠とかやのは浦上から離れた母方の祖母のところに8月7日に預けられる。永井は放射線医学の専門で、自分自身放射線の浴び過ぎで、余命も数年と言われており、妻に自分の後のことをいろいろと語ったりしている。しかし8月9日午前11時2分長崎を襲った原爆は事態を全く変えてしまった。浦上に残っていた妻はその爆風でほとんど即死同然。大学に残っていた永井と二人の子どもが後に残されることになった。その後おばあちゃんは缶の中に娘（永井の妻）の骨を拾い、戻ってくる。4年生の誠

には語るが、まだ小さいかやのにはことの真相は語れない。

終戦後、10月18日に国民学校は再開されたが、25人の教師のうち残っていたのは3人、また1800人の生徒の中でその日登校できたのはわずか30人であった。11月23日、浦上教会合同慰霊祭において信徒代表として弔辞を述べた永井は、亡くなった人たちは神の犠牲として捧げられたと語るが、これに対しては異議ありの言葉も飛びかう。娘をはじめ多くの親族を失ったおばあちゃんも永井に対して「もし神の犠牲ならばどうしてこんなに小さな子どもまで奪うことがあるだろうか。あれはまさに原爆によって殺されたのだ」と食ってかかるが、これに対しては「私には裁けない。『復讐するは我にあり』という言葉信ずるしかない」とさみしそうに答えるのであった。

戦後、彼の体はますます衰弱していくが、それに反比例して彼の精神は研ぎすまされ、床に横になりながらも忘れてはならない出来事として長崎の原爆を語る。ここでは永井氏の立場から、自分の子どもが戦争の死、戦争をどのように受けとめ、また原爆で死んだ母親（永井の妻）ともうすぐ死んでいく父親（自分）を越えてどのように生きていくかということに焦点が当てられている。クリスチャンとして戦争、あるいは戦争の死をどのように受容していくかということをめぐるさまざまな葛藤が描かれているのが興味深い。

*

ここでとりあげた三つの作品は限りなく悲しい作品である。確かに、戦争のきわめて酷な状況の中で、多くの死を目の当たりにしながらも、力強く生きようとする姿は描かれているが、このようなことを引き起こした原因を考えると、やはりやりばのない怒りを感じずにはいられない。ありのままの姿を、ある意味で淡々と描いていくそのタッチは、くしくもこれらの作品が共通して持っているものである。我々は戦争における死、あるいは戦争を子どもたちにどのように伝えていくべきかということに対する一つの答え方をこれらの作品のうちに見るような気がする。

(2) 友だちの死を乗り越えて

～『マイガール』『マイフレンド・フォーエバー』～

ここで扱うのは二つの映画である。一つは『マイガール』であり、もう一つは『マイフレンド・フォーエバー』である。二つに共通していることは、ともに友だちを失うことがメインテーマになっていること、そしてともにアメリカの映画であるということである。

*

まず1991年に劇場で公開された『マイガール』の方は主人公は11歳の少女ベダである。彼女の家は葬儀所であり、お父さんはその仕事に忙しい。正確に言うと、ベダを産んで三日後に死んだ妻のことを忘れようとして仕事に必死になっていると言った方がよい

かもしれない。そんな彼の所に美人の若い助手が働き口を求めてやってきた。ベータは自分の命と引き換えに母親が死んだとずっと思っており、そのために死体を見るのも非常に怖くなっている。また、自分のパパが若い助手と仲良くなっていくのが心配でならないが、一方でベータにはいつもいっしょにいるトーマス・Jという男の子がいて、いつしか二人はお互いに惹かれていくのを感じている。何かにつけ不安定な年頃なのである。あるとき、ベータはトーマスとキスを体験し、そのことで自分の不安と焦燥の念から逃れようとする。お互いの間には淡い気持ちが芽生えるが、それも束の間。不運なことに、トーマスはベータにもらった大切な指輪を探そうとして蜂の大軍に襲われ、命を失ってしまう。

短い間に、あまりにも多くのことが彼女には起こりすぎた。しかし若い助手（やがてパパの妻となるが）が彼女に深くかかわる中で、生きることへと励まされ、それまで聞くことができなかった母親の死の理由を父に思い切って尋ねることができるようになった。こうして彼女はトーマスの死を乗り越え、「柳の木を見ると私はトーマスを思いだす。でも死は私たちを引き離さない。彼はいつも心にいる」と最後には詩を朗読することができるようになる。ベータにとって「母の死」と「トーマスの死」とはともに大きなものであるが、結局は彼女がより大きく成長していくための一つのステップとして生かされていくことを我々は知るのである。

*

もう一つは『マイフレンド・フォーエバー』である。1995年の映画で、原題は《The Cure》（治療）と言い、エリックとエイズ感染者デクスターとの友情がメインテーマである。これも主人公は11歳である。そしてそれは一夏の出来事であった。

エリックは自分の隣に住んでいるデクスターと遊びたいと思うが、エリックの母親は感染するからと言って絶対に会わせない。しかしエリックは親の目を盗んでは、彼らの家に行き一緒に遊んでいた。そして本当に子どもらしい気持ちから、エイズを直すためにさまざまなお菓子を食べてみたり、さまざまな草花を煎じてみたりして実験をする。あるとき、ニューオリンズ州の方に特効薬が見つかったと新聞でみて、二人は川を下って探検に出かける。それがもとでデクスターは調子が悪くなり病院に入院することになる。しかし入院してからも二人は医者をもだまして死んだふりをして驚かしたりするが、やがて本当の死の時がやってくる。エリックはデクスターの治療ができなかったことを彼の母親に謝るが、デクスターにとってエリックのような友だちができたことこそ幸せだったと逆に感謝して語る。この作品では、まさに現代的な話題であるエイズがとりあげられているが、その死に至る病への治療としてエリックとデクスターの友情が語られているところにこの作品の重要性があると思われる。

*

両方の作品に共通している一つのことは、死んだ人をすっかり忘れるわけではないが、しかし残された者はそこから立ち直り、再び生きていかなければならないということではないだろうか。『マイガール』のベータの最後の詩はまさにそのことを歌っているし、『マイフレンド・フォーエバー』のエリックも実はデクスターに対していろいろと治療しようと試みながら、彼との出会いによってその満たされない生活の思いを治療され、癒されていたようにも思われるのである。

また両者は興味深いことに、そのラストシーンで亡くなった子どもの母親（『マイガール』ではトーマス・Jの母親、『マイフレンド・フォーエバー』ではデクスターの母親）が登場し、「時々遊びに来てね」と語りかける。ベータはうなずきながら、「天国で私のママがトーマスを見ているわ」と言い、またエリックは、デクスターが生前に母親によく語っていたセリフを真似てその母親に語りかける。ここにあらわれている一種のユーモアは、悲しい「死」の出来事の中に埋もれることから、新しい「生」へ立ち上がり始めたことの一つの「徴し」として見ることができるだろう。

(3) グリム童話から

～『ねずの木の話』⁹⁾『歌う骨』¹⁰⁾～

昔話の研究は、民俗学・文芸学・心理学等の立場から行なわれているが、今日、それらは互いに補い合う学問として、昔話の解明に欠くことができないものとして捉えられている。グリムに限らず、昔話は一般に生や死を取り扱ったもの、残酷性の際立ったものが多いとされていて、これらの研究は、昔話の研究の中でも中心的なテーマといっても過言ではない。特に、グリムの昔話は、戦後、その残酷性とナチズムが結び付けられ、「ベルゼンからアウシュビッツに至るドイツ人の残虐な行為は、グリムの昔話と考え合わせてみれば必ずしも理解できないことはない¹¹⁾」という声があがり、ジャーナリズムをおおいに賑わした。イギリスなどではグリムの昔話を発刊禁止処分にした時期があったほどである。また、グリムの当時も初版本に掲載された『ねずの木の話』や『子どもたちが屠殺ごっこをした話』はあまりにも残酷で子どもの読み物としてふさわしくないと批判され、後者の方は第二版から取り除かれた。しかし当然のことながら、先の見解は的を得ていない。グリム自身も「残酷なところも民間伝承の大切な一面である」としているし、それが昔話が昔話たる所以であると考えられているからである。今回、グリムの昔話からテーマに関わるいくつかを取り上げたがこれは様々な形として出ている残酷性の場面の中からのほんの数例にしかすぎないことを断っておきたい。

『ねずの木の話』

ねずの木の話は、子どものないお金持ちと信心深い妻が、子どもをたいそう欲しがり、「雪のように白く血のように赤い」子どもをねずの木に願い、願いがかなえられ、男の子が生まれると妻はだんだん衰弱し、ねずの木の下に埋めてほしいと言い残して死んでしまうところから始まる。金持ちは、しばらく泣いていたが、すぐに次の妻を迎える。次の妻は女の子を生むが、初めの妻の子どもがあまりにもかわいいのでにくらしくなり、年中追いかけてまわし当たり散す。あるとき、継母は、男の子に大きな重たいふたのついている箱の中からリンゴを取らせようとしたとき悪魔に取り浸かれ、男の子が下を向いたときふたをボタンとしめた。男の子の頭は飛んでしまい、リンゴの中に落ちてしまう。継母は恐くなり、なんとかこの罪から逃れたいと思い、頭を体にのせ白い布で巻きつけ、椅子に座らせ手にリンゴを持たせる。そこへやってきた娘に、お兄ちゃんにリンゴを一つもらうように言い、くれなかったらお兄ちゃんのほっぺをぶつようと仕向ける。娘がそのようにすると、頭はころげ落ちてしまい、母親は「たいへんなことをしたね」と言い、スープにして食べてしまうことにする。父親が帰ってきて、「ぼうやはどこにいる？」と聞くが、娘は泣きつづけ、妻はおばあちゃんのところへしばらく滞在することになったとうそをつく。父親はいぶかしがるがスープを食べるとおいしくて止まらなくなり、全部たいらげてしまう。妹は、父親が投げた骨をテーブルの下から集め絹の布に包んで、ねずの木の下の緑の草の中に置く。そこから霧のようなものが出て、一羽の美しい小鳥が飛び出しみごとな歌を歌う。歌は「お母さんがぼくを殺し、お父さんがぼくを食べた。妹のマルレーンちゃんがぼくの骨をのこらずさがし、絹の布につつんで、ねずの木の下においた。キウィット、キウィット、ぼくはなんてきれいな鳥なんだろう！」というもの。

小鳥は、初めに金細工師の家飛んで行き、美しい歌を歌い（金細工師には、何を歌っているか解らない）、金細工師がもう一度聞かせてほしいといったとき、金のくさりと引き替える条件で歌を歌う。昔話の特徴である同じようなパターンがその後、繰り返される。靴屋では赤い靴、水車小屋では粉ひきの石臼をもらった小鳥は、右足のつめにくさを、左足のつめに靴を、粉ひきの石臼を首にはめて父親の家に飛んで行く。その時、家にいた父親は晴れやかな気分になったのに対して妻は、不安でたまらなくなる。美しい歌を歌う小鳥にうれしくなった父親がもっとよくその歌を聞こうとして外に出ると、小鳥は金のくさを父親に落とし、丁度、父親の首にはまる。妹が外に出ると赤い靴が落とされ、妹はそれを履き踊って部屋の中に入る。この時、母親の耳にだけ歌の意味がわかるから彼女の髪の毛は逆立ち、パニック状況のピークに達する。母親が「わたしも楽になれるか外に出てみよう」と言って外に出ると、そこに上から石臼が落ちてきて、母親はぐしゃりとつぶれてしまう。するとけむりと炎がもえあがり、それが消えるとそこにお兄ちゃんが立って

いて三人は手を取り楽しい食卓を囲むというところで話が終わる。

*

『歌う骨』は、親が子どもを殺した先の話と違い兄弟の話であるがたいへんよく似ている。国を荒らすいのししを退治した者に王さまの娘の婿になることができるというおふれが出て、貧しい子どもの兄弟が名乗りをあげる。兄は、悪知恵がありぬけめがなく、弟はむじゃきでぬけている。森に入ると、弟は、小人に助けられ、やりをもらい、なんなくいのししをしとめてしまう。それに対して森に入る前にまず一杯やっていた兄がそれを聞き、自分の手柄にしたいと思い、弟を橋の上で後からなぐりつけ、弟は川に落ち死んでしまう。兄は、王さまの娘の婿におさまる。長い年月がたち、あるとき、羊飼いが小さい骨を見つけ、それで笛を作った。笛をふいてみると「ああ、もし、ひつじ飼いさん、あんたは、わたしの骨でふきなさる。わたしの兄がわたしを殺し、橋の下にうめました。いのししをよこどりして、王女さまをおよめにもらおうと」と歌いだした。羊飼いは、驚いて早速王さまの前で笛を吹き、全てが明らかにされた。兄は袋に入れられ生きたまま水にすめられ、弟の骨はりっぱな墓におさめられた。

*

この二つは、親子あるいは兄弟という違いがあるが、人を殺す内容を取り扱っており、動機は、昔も今も変らない人間の弱さからくるねたみである。グリムには、継母がたびたび登場する（実は、『白雪姫』の実母説もあったが、グリムは、継母説の方をとったという）。翻って現代の様々な事件を見ると、その現状は、親子心中や子殺し、親殺しなど昔話以上に残酷で殺伐としていることを思い知らされる。そのように考えると昔話の残酷性だけを取り沙汰することは当を得ない話であるし、むしろ昔話が人間の本質を現しているものと考えられるのである。

次の共通点として、対照的な対比と罪（悪）のもたらす結果である。前者の話では、信心深い母親と妬み深い継母、その報いは、ねずの木から出てきた霊のようなものから小鳥が生まれ、小鳥が歌うことによって継母が追い詰められていき、その結果、父親と子どもには、金のくさりや赤い靴、それに対して、継母には、石臼によって死ぬと報いがもたらされる。後者の話は、悪知恵の働く兄と純真な弟の対照性、そして、何年もわからなかった悪事が骨が歌うということによって明らかにされ、兄には死がもたらされる。この場合弟が生き返るということはなかったが、りっぱな墓におさめられる。このような明白な対比は、昔話の様式として特徴づけられており、それが子どもに悪影響をもたらすという心配は不要であり、むしろ、悪と善がはっきりと区別されることにより、善の原理が勝つことが子どもにとって重要とされている。これは、昔話の表現方法についても同じである。昔話の残酷な場面は、写實的に描かれているのではなく極端にあっさりとした表現になって

いる。その結果、子どもは、次々と展開されるストーリーに引き付けられることになる。松岡亨子は、多くのストーリーテラーが、昔話を聞く子どもたちと話し手との間にある引き合う糸のようなものの緊張関係は、他の話を聞くときより強いものを感じるという報告をしている。¹²⁾

子どもたちがファンタジーを豊かにすることは、目に見えないものを想像し、そこに実在するものの核心をつかむことであり、目に見える以上の真実を認識する力に繋がるとシントラーは言う。そして、それはやがて神の神秘を感じるとる力を身につけていくことになっていくと確信する。この場合、もちろん昔話の残酷性についてだけを行っているのではない。シントラーは、旧約聖書の最初の殺人、兄カインが弟アベルを殺したことについて「死に対する備えをすることは、初めからすでに、子どもに非安全性、人間存在の未解決性を経験させること、子どもに生命のないものと知り合う機会を免れさせないこと、しかした、同伴されることは何を意味するかを体験させることを意味します¹³⁾」と述べ、死を避けるのではなく、様々な機会（自然の中での生成と消滅、年老いた人々との出会い、哀悼作業など）を通して考えたり触れたりすることが大切であるとしている。シントラーはまた、レナー・スピッツが、子どもは約8ヵ月で命のないものは話ができないことを発見することを実証していること、ピアジェが「死の現象を通して子どもは、世界の全てについて、それらは人間とその幸せのためだけに用意されていると考える傾向を撃ち破るように強いられている¹⁴⁾」との見解を引用し、子どもがいつの日か自分の限界を認識し、受け入れることを学ぶ、すなわち、放棄することを学ぶことの重要性を説いている。このような感情面での訓練は、病気の子どもや病気の人々一般への魂の配慮にとって決定的であるとし、「魂の配慮とは、健康回復の専門家としての医者がもはや機能しなくなってしまったから、死と魂の専門家が登場し、神を持ち出すといったことを言うものではありません。神は、医者がもはや何もできないところで成功の保証をもたらす方ではなく神は共に歩んでくださる方です¹⁵⁾」と同伴される方の存在を認識することの必要を述べている。このような魂への配慮は、特に子どもにとっては、おとなとの基本的な信頼関係のなかで培われることが求められている。

（4）老人とのかかわりの中で

～『じいと山のコボたち』¹⁶⁾～

老人と子どもにまつわる話は、古今東西を問わず描かれてきたテーマである。最近は、創作絵本などにも多く取り上げられ目につくようになった。今回、紹介した作品はすでに20年前に平方浩介によって発表され、多くの版を重ねているが、高齢化社会を迎えた今日、多くの示唆を与えくれる物語である。

*

コボたちとは、岐阜県奥揖斐の言葉で子どもたちを指す。この物語は「ばあが死んだというのに、じいにはそれがわからなかった」という書き出しで始まる。

じいは、葬式の日も翌日もその次の日もばあが死んだという事がわからず、じいのそばにいたばあに語りかける。同居している息子は、それがボケであると信じることができずに何かに付けて強い言葉で諭すようになる。じいにはそれがおもしろくない。息子夫婦が山仕事に出かけている間、じいは一人で留守番である。ある日、じいはかまどに生木の枝や草をわんさか詰め込み、煙をもくもく出し火事寸前のさわぎを起こす。じいには家事の手伝いのつもりであったが息子夫婦の心配の種になる。翌日息子は、物置小屋を片付け、そこをじいの隠居部屋にする。じいは少ししぶったが、いろいろ言われ、そこで寝起きすることになる。留守の間、母屋には鍵がしっかりかけられていて、中に入ることが出来ない。

退屈しているある日、じいの耳に下の川から、カワタロウたち（子どもたち）の歓声が聞こえてきた。じいの顔は、ぱっと明るくなり目が輝いた。じいは急いで降りていき「やはあーっ！」とあって別人のようになる。10人ほどの子どもの中に、じいの家から5分とかからないところに住んでいる親戚のセンタロウがいた。今日から夏休みで水遊びが出来るということだった。じいは、子どもたちにはやしたてられ、着物を脱いで泳ぐところを見せることになる。じいが水に入ると、まわりに子どもたちが輪をつくり、河原にあらるとそこにまた輪ができ、じいはその日、こころゆくまで川ですごした。じいは、子どもの頃に会ったという本物のカワタロウの話をしたり自慢話に花を咲かせた。子どもたちは、目を輝かせそんな話を聞いた。この日じいはきげんが良かった。翌日も、じいは朝からきげん良くセンタロウの家に行ってみるが、朝は勉強の時間だからとおっかあにことわられる。じいは、魚つりにいくことを伝え竿を借りる。センタロウは後から行くと約束する。センタロウは、魚釣り名人のじいと楽しい時間を過ごし、午後にはじいの家に子どもたちが誘いにきた。このようにして、じいと子どもたちとのうれしい秘密の時間が生まれた。しかし、息子は心配し心臓マヒでもおこし、村の衆に迷惑をかけてはいけないと川遊びを止めさせる。じいは、それなら一本竿を買ってくれと頼む。新しい竿を買ってもらったじいは、毎日あまご釣りに精を出す。家にはもちろん、近所にあまごを配り喜ばれる日が続く。センタロウもときどき一緒だった。センタロウたちの夏休みが終わると、じいはまた退屈になった。じいはセンタロウに死ぬ前に魚釣りの一部始終を教えてやりたいと思っていたのだった。

そんな日が続いていたある日、じいは突然怒りだした。はなれといえば聞こえはいいが、つまりは、家の主人を母屋から追い出し物置小屋に隔離したこと。そして、天井からは、

雨がだだもりといって大騒ぎするような妄想もひどくなる。そんなある日、はなれにまで錠をかけられたじいは、ある決意をしたかのようにげたを戸のガラスに投げつけた。じいは、これでもかといわんばかりにおもいきりあちこちげたを投げ、ガラスを木っ端微塵に割ってしまった。外からも石を投げ入れ、小屋の中は足の踏み場もないほどになる。そこに遊びにきたセンタロウはおどろくが、魚釣りに出かけようと誘うじいにおかしいと思いながら、断ることができず一緒に出かけることになる。いつもより遠い谷まで来るとじいの言うとおり、大きなあまごがよく釣れた。ところが午後4時過ぎごろ、たいへんなことが起こった。ひとかかえほどの大岩がくずれ落ちてきたのだった。じいは、その下敷きになってしまった。じいは、駆け寄ったセンタロウに弱い声でしっかりとこれからしなければいけないことを告げる。村の者を呼びに走っているセンタロウの耳に「ぼうになにかあったら、なんにもならんぞ」というじいの声が響いていた。

じいが、待っている間、息子ややさしかった嫁が現われた。痛みがときどきやってくる。体がどんどん冷えてくる。まもなくじいは、明るい光の中で若いときのばあと話をしていた。それはそれは楽しいときであった。じいはササユリを持ち、ばあの頭にさしながら、「おまいには、かんざしひとつ、買ってやれなんだな」と言っていた。

じいは、急ごしらえの板の担架のようなものに運ばれて村に帰ってきたが、気がつかないまま死んでしまった。センタロウは、大きな声を出していつまでも泣き止まなかった。

＊

この物語は、生けるもの全てが老化し、やがて死を迎えるという現実とともに老化していく人間にとっての「居場所とは何か」という問題が突き付けられている。それとともに、ある点で老化することは子どもに返ると言われるように、じいが山のコボたちと川遊びに興じている姿は、本質的な共通点を感じさせるものがある。ボケによって様々な失態をさらしてしまうじいだが、子どもとの交流によって生き生きとよみがえっていく。じいは、先に生きてきた者として子どもに何かを伝えようとする。それは釣りの方法だけではなく。子どもは、それをキャッチする能力を持っている。センタロウは、じいから大きな何かをもらったのである。だから、じいが死んだとわかったとき大泣きをしたのである。この物語から私たちが学ぶことは多い。

（5）死とその向こうにあるもの

～『マッチ売りの少女』⁷⁷⁾『天使のおともだち』⁷⁸⁾『ペレと新しい生命』⁷⁹⁾～

『マッチ売りの少女』

アンデルセンの代表的な作品の一つとして世界中に知られている話であるが、おそらく多くの人々が、子ども時代にこの話の主人公に同情し小さな胸を痛めたのではないだろう

か。貧しい少女は、アンデルセンの母親がモデルで、親からものごいをするように言い付けられたができず、とうとう橋の下で一日中泣いていたという話を基にしている。

おおみそかの晩、一本のマッチも売れない裸足の貧しい少女が寒さのあまり凍えそうになり、一本のマッチをすって暖をとろうとする。すると、ストーブが現われるがマッチの火が消えてしまうとストーブも消えてしまう。もう一本つけると、今度は、お金持ちの家の中が浮かび、なんと背中にフォークとナイフを刺したままの丸焼きのガチョウが少女に向かってやってくる。三本目のマッチは、ローソクを何千本も灯した美しいクリスマスツリー。マッチが消えると、ローソクが空に向かって高く高く登っていき、ついには星になる。その一つが流れ星になって落ちていくのを見たとき、唯一、自分を可愛がってくれたおばあさんを思い出す。四本目のマッチをすると、そのなつかしいおばあさんが光り輝いて現われた。少女は、マッチの火が消えるのをおそれ、おばあさんを引き止めるために、残りの束を全部使ってしまう。おばあさんが、こんなにきれいで、大きかったことはなかった。おばあさんは、少女を腕に抱えうれしそうに飛んでいく。二人は、神様のそばにいたのだった。あくる朝、通りの家のすみっこに少女は、赤いほおをして、口元にはほほえみを浮かべて死んでいた。

アンデルセンの童話の中でも、大変短くシンプルなストーリーであるが、そうであるからこそ私たちに切々と迫ってくるものがある。靴職人の貧しい家に生まれ、当時の階級社会の辛酸を味わい、食べることに事欠いた経験のあるアンデルセンの眼は、常に子どもや弱い立場の人々に注がれていた。また、少女が死んでしまうことによって、唯、単に可哀相な結末に同情を抱いていた子ども時代の感じ方や読み方は、それはそうとして、今、私たちは、アンデルセン自身の生涯とキリスト教信仰の立場から読み返す必要があるのではないかと考える。アンデルセンは、最後に次のような言葉で締め括っている。

「少女が、どんなに美しいものをみたか、どんなに光り輝いて、おばあさんといっしょに新年の喜びをお祝いに行ったか、だれもしりませんでした」と。

元旦の朝、その口元にはほほ笑みを浮かべたまま凍え死んでしまった、かわいそうな少女の姿は私たちの心に強く印象づけられる。しかし、アンデルセンは、それ以上に死の向こうにある幸せを信じていたと思われる。どうにもならないこの世の悲しみや辛さを黙って受容している少女は、ある意味で強いのである。

R・シントラーは、死の病気にかった子どもが自分の死を強く予感し、死の近いことを感じるときに非常に強い孤独と不幸を感じ、何らかの「信号」を送っていること、それは直接的な問いではなく、しばしば遠回しの問いであったりすること、わけても、図象や絵の色、数の象徴性などについて述べ、死の病にかかった8歳の少女の次のような話を紹介している。

その少女は、母親にアンデルセンの『マッチ売りの少女』の話をしてくれるように頼んだ。少女の死後何年もたってから、母親は、次のように話した。「うれしいことに、彼女は決して（死についての）質問をしなかった²⁰。」これに対して、シントラーは、スーザン・バッハの次のような言葉を引用している。「もし、その母親にこの特定の問い（この話をなぜ聞きたいのか）を尋ねるように助けることが出来ていたなら、この小さい患者さんは、多分、彼女の内面にあるものを誰かと分かちことができ、一人ぼっちで死ぬことはなかったでしょう⁽²¹⁾」と。しかし、これに対して、シントラーは、小さい女の子にとって、この物語は答として十分でなかったかと尋ねてみたい、と述べている。表面的には、孤独に見える死であるが、大好きなおばあさんとともに神様のみもとにいる真の安住がアンデルセンの信仰として見えてくるのである。

*

『天使のおともだち』

キューブラー・ロスは、スイスの精神科医で末期患者を精神的に支える仕事の第一人者である。1969年、『死ぬ瞬間』の出版によって一躍世界に知られるようになり、その後の一連の著作とともにその働き（あらゆる喪失体験からの癒しを助けるためのワークショップ）を精力的に続けている。自らも、三つ子の一人としてたった900^{グラム}で生を受け生死の中をくぐって不思議な体験をしている。また、二万件以上の臨死体験者の聞き取り調査などによる死そのものについての研究と病人、特に子どもへの配慮や家族に対するケアなどの先駆的な取り組みは注目されている。

*

二人の子ども、スージーとピーターは、隣同志でいつもいっしょに遊ぶ大の仲良し。この二人には、秘密の友達がいる。それは、おとなが知らないことやわからないこと、また忘れてしまったことをたくさん話してくれるテレサとウィリーという天使。

スージーのお父さんは一年前に亡くなり、お母さんは悲しい顔をして考えこむことが多くなっていた。ピーターの両親は働いていたので、スージーのお母さんがピーターの面倒を見てくれていた。ピーターは、いつもスージーを元気付けていたが、彼のお兄ちゃんもお姉ちゃんも天使の話を信じてくれないことが悲しかった。

ある日、ピーターが眠りにつこうとしたとき、体がふあふあ天井に浮かんでしまい、天井を通りぬけ、あっという間にピーターの住む町の上に、それから瞬く間に星にまで登っていった。ピーターは自分が飛んでいることに気づき、家の方を見ると自分はちゃんとベッドに眠っている。とてもステキな気持ちでこんなことがあってもいいのかなぁと考えている。そのうち、ピーターは、自分が好きなところを思い浮かべると、どこへでもあっという間にそこへ行くことができることに気づく。ふと見るとすぐ隣にテレサとウィリーが一

緒に飛んでいる。飛んでいるとき、ピーターは、スージーもこの冒険と一緒に楽しめたらと思った。思った瞬間、ピーターは、スージーの部屋にいる。丁度、スージーは、お母さんに叱られているところ。ピーターが慰めようとやさしく手を差し伸べているとスージーも別の世界に来ていた。二人は、今まで見たことのない不思議な色や美しい花を見てステキな香りのあるところを自由自在に飛んだ。そして、大勢の人々（おとなや子ども、肌の違う人々）を見る。みんなとても幸せそう。愛と平和が充ちあふれている。天使のウィリーは、ピーターの考えていることが全部分かってしまう。ウィリーは、ピーターに言った。「神様が私たちのからだを造ってくれたのだから、誇らしく思わなければいけないよ。だれの方が美しいとか美しくないとか比べてはいけない。他の人にはないその人らしいところに美しさがあるんだよ。この宇宙には、二人として同じ人間はいないんだからね」と。

ピーターは、ここでは口や舌で話す必要のないことに気づく。相手の考えていることが全部わかって通じ合えるのだ。ウィリーは、神が人間に与えられた意志という贈り物について、また、一人一人が神のかけがえのない生命の一部だということを話す。ウィリーとテレサは、二人をぎゅっと抱き締めた。二人は、これほどまでに大きな愛とやさしさを感じたことはなかった。目を覚ましたとき、二人はそれぞれのベットに帰っていた。

夏が過ぎ、木の葉が散り初める季節になって、ピーターはだんだん顔色が悪くなり、隣の町の大きな病院に入院した。二人は一緒に遊べなくなった。スージーは、ピーターがいなくなって淋しくてたまらない。まだ、手紙も書けないのだから。

日曜日にピーターが帰ってきた。そのとき、スージーは、ちょっとだけ会うことが出来た。スージーが砂場の砂をひとつかみと一輪のすいかずらの花をそっと渡すとピーターはかすかにほほえんだ。もう、話すこと考えることが難しくなっているとスージーは思った。「ぼくたちのひみつおぼえてる？」とピーターはつぶやいた。スージーは、うんうんとうなづいてピーターの手にやさしくふれた。一週間後、スージーは、お母さんに連れられてピーターのお葬式に行った。そのとき、スージーは、お棺のそばで「これはほんとのピーターじゃない！」と思った。ピーターはちょうちょがまゆから出ていくのと同じように、自分の体から出て自由に飛びたち、今、テレサとウィリーと一緒にいることがわかった。おとなたちが泣いたりつぶやいたりしていても、スージーにはピーターがときどき遊びにきてくれるし、秘密の友達、テレサとウィリーにも会えると信じることができた。

キューブラー・ロスは、治る見込みのない病気の人々が幸せな気持ちで死んでいくことが出来るように、特に幼い子どもの魂と残された家族を助けることに心を注いでいる。この話もおそらく体験者の話が基になっていると思われる。彼女は、死への恐怖や不安を抱え苦しんだ多くの人々に接し、魂の叫びを聞いた人である。その中から一つの死生観を持ち、死ぬことがわかっている人には、死そのものに怯える必要のないこと、また残された

家族がどのようにその心を癒すことができるかをメッセージしている。すなわち、死は生の延長線上にあり、ちょうがまゆから脱皮するように形を変えることであり、死とともに全てが無に帰してしまうことではないということ、新しい形での生が始まるというのである。人は、死というものによって何を学ぶのであろうか、それは人によって様々であろう。キューブラー・ロスにとって死は、死んでいった人が何を残してくれたかを思い起こし、残された人が、生きている間に互いに愛することを学ぶことである。

*

『ペレと新しい生命』

日本語訳がまだ、出版されていないのが残念であるが、レギーネ・シントラーの生と死についての物語『ペレと新しい生命（いのち）』は、ぜひ取り上げたい内容の絵本である。幸いにも加藤善治氏と増山氏による訳が手もとにあるのでここに紹介したい。原本は、ヒルデ・ハイドゥックーフスによる淡い美しい色の絵がこの物語を生かしている。

ペレは、三つの塔のある黄色の家に住み、彼を愛している両親がいて、おもちゃもいっぱい持っていた。しかし、ペレの持っていたものの中で、一番の宝物はトモという友達。二人はよくボールを空高く投げて遊んだ。二人の家は垣根がなくいつでも行き来できた。二人は、その真ん中に小さい花壇を造った。彼らは、土が柔らかくなるまでよく耕した。庭師は、二人にいろいろ形や色の種をくれた。庭師は、「種の中には、新しい生命がひそんでいるんだよ」と教えた。二人は、毎日水をやり芽が出てくるのを待った。

ある朝、ペレがトモの家の窓にいつものサイン、小さい砂利石を投げたが何も応答がない。そんな日が続くペレは不安になる。ある日、ペレはトモのお母さんを訪ねる。お母さんは、黒い服を着て頭と両腕をぐったりテーブルの上にのせていた。お母さんは、ペレを見つけ「おまえかい、ペレ」「トモは重い病気だったの。突然に、あの力強いトモが」といって、ペレをしっかり抱き締めた。かまどの横にあった新しい木靴、それはペレが欲しくてたまらなかった木靴だった。帰るとき、お母さんは、その靴を持たせてくれた。トモは、帰って母親に聞いた。

「お母さん、死ぬってどういうこと？」

「トモは、今はもう痛みがないのだよ。彼は、天にいるのよ」

「天は、ずっと遠いところだよ。力強いトモでさえボールを天にまで投げることが出来なかったんだ」

「その天ではないのよ、ペレ。新しい生命なのよ。神様の下での生命よ。私たちは、それが、どんなものだか誰も知らないの。だから私たちは、それを天と呼ぶのよ」

ペレは考え続けた。ペレは、庭師にもらった種のこと。一緒に新しい生命を待っていたことを思い出した。でも何日も水をやっていない種は、今ごろ干涸びているにちがいない。

ペレが走っていくと、丁度、じょうろを持ったトモのお父さんが立っていた。小さい花壇には、たくさんの芽が出ていた。「新しい生命」、ペレはつぶやいた。出てきた芽のさきっぽの所に、トモとペレが地面の中に押し込んだ種粒の乾いた殻がついていた。

ペレはトモのお父さんと長い間、座って考えていた。ペレは、さっきまでの悲しそうな顔ではない眼の輝いたトモのお父さんを見た。お父さんは、半分腐った種の殻を自分の手のひらにのせて言った。

「トモもきっこうなんだ。彼の体は、病気だった。今、彼は死んでしまった。彼は再び土になったんだ。しかし、それは、全部のトモではない。彼は、この種粒のように新しい、違った生命を持っているんだ。美しい生命をどこかで。私たちがそれを知らないだけなんだ」

お母さんもそこへやってきた。お父さんは続けた。

「力ある支配者のように、死が世界中を歩きまわる。死は喜んで死にたいと思う年老いた人々を連れていくだけでない。彼はときどき、若い人や健康な人をも連れていく。大勢の人が彼を恐れている。私たちは、あまりにも少ししか新しい生命を考えない。神とともなる生命のことを。だから、おまえの言ったことは正しいよ。ペレ」

それからペレは、毎朝トモと二人で造った花壇に水を運び、つぎつぎ青い花、赤い花、黄色の花が咲き、新しい生命は、ますます美しくなっていく。

ペレは、墓地で思った。「ぼくは、トモの古い生命のことを考えるんだ。トモの古い殻が埋められているこの場所で。ぼくはトモのことを忘れないよ」

彼は、ときどきトモのことを思って泣くこともあったが、美しい花壇に水を注ぐたび、トモの新しい生命を考え、うれしくなるのだった。

この物語は、子どもたちと死について話し合おうとするときの一つの資料として、また「たくわえ」として語ることを目的として作られた。物語の中には様々な意図が含まれているが、中でも「種粒」は、重要な意味を持っている。「種粒」は古い生命の象徴として描かれているのだが、それはまた、全ての種粒が一つとして同じものがないのと同じように、人間の生命も全て異なった姿を持ったものとして描かれているのである。

種粒は、播かれ、水を注がれるとやがて芽をだす。中からは、種粒を見たとき予想もしなかった全く違う形の生命、新しい生命が現われる。

シントラーは、ここにキリスト教の死後の生、すなわち、永遠の生命を示している。死は、この世での終わりであり、絶望的な苦しみや悲しみが伴うものである。シントラーはこのとき、永遠の生命に生きることをあまりにも美しく具象的に描き強調することには注意をしなければならないとし、悲しみの大切さを軽んじることのないように述べている。死後の生はわからないのだが、私たちに確信できること、それは、「神がともにいます生」

を生きるということ。死は悲しいが、しかし神に守られ、神とともに生きる生に希望を見いだすことができるというのである。

§ 「精神の死」という問題

我々は前章において、幾つかの観点から「子どもと死」の問題をとりあげ、その中で死を通して、あるいは死を越えて生きようとする子どもたちの姿について見てきた。しかし先に提出した「子どもといっしょに、どのように死と共に生きることが可能か」という問題に、キリスト教幼児教育、キリスト教保育の立場から答えるためには、まだ越えなければならない幾つかのハードルがあるように思われる。もちろんこの小論でそのような大問題に答えることは不可能であるし、越えなければならないハードルを明確に述べることも困難である。そこでここでは、先の問題に答える前に、是非注目しておかなくてはならない一つのことをとりあげることによってこの論を閉じることにしたい。

それではその一つのこととは何か。それは「精神の死」という問題である。我々はこれまで「子どもと死」という場合に、「死」というものを文字どおりの意味で、すなわち、肉体の死を意味するものとして扱ってきた。レギーネ・シントラーもそのような意味で用いていたし、幾つかの作品の中で扱われた「死」もすべてそのような意味であった。子どもが実際の死、つまり肉体の「死」というものに直面することによって、逆にそこから「生」の豊かさ、「生命」の大切さを感じとっていくことの重要性は強調してもしすぎることはない。それでは「精神の死」ということについてはどうであろうか。そもそも「精神の死」とは何を意味するのであろうか。これについては我々は「肉体の死」を語るほどに明確ではないことに気づくであろう。しかしそれは我々の作りだした虚構なのであろうか。そうであるとは思われない。

例えば、我々は以前には考えられなかったような残酷な殺人の報道を耳にすることがある。そのようなとき、それを引き起こした人間の精神のうちに何か尋常ならざるもの、つまり通常の意味で生きているとは思えないような精神の営みを感じずにはいられない。

あるいは、戦争において多くの民衆を殺したり、ある特定の民族を集中的に殺戮したりするその人間の精神の営みのうちに、正常な精神の働きが麻痺していることを感じない人がいるだろうか。

このように「精神の死」というのは、確かに比喩的、あるいは象徴的な意味合いを有している。しかしそれは決して作り話ではないことがわかるだろう。今、我々はやや極端な例をあげたが、このような「精神の死」的な状況は、今日の我々の社会の中でもいろいろ

なところで見いだされるように思われる。さしあたって問題となるのは、いわゆる肉体的な「死」というものを通して豊かにされることが望まれる「生」そのものの営みのうちに、すでにこの「精神の死」の状況が入り込んでいるということであり、「子どもと死」の問題を考える場合にも、それと無縁ではありえないということである。

ところでもう一度「精神の死」という言葉に戻り、それを聖書的に言うならば、それは特にアダムとエバが神の約束を破って善悪の知識の木の実をとって食べたという原罪と深く関係している。彼らはそのことによりやはり同じく楽園の中央にある命の木の実を食べることができず、人間の世界にいわゆる「死」が入り込むことになったが、大切なことは聖書において「肉体の死」に先だって「精神の死」の状況が提示されていることである。

この文脈では「精神の死」とは、神と人との間に築かれていたしかるべき関係を崩して解体していくことのうちに見いだされるのではないだろうか。このことをもう少し一般化して言えば、我々が他者とのしかるべき関係を崩したり解体したりする傾向こそが「精神の死」的な状況なのではないだろうか。

例えば、人間関係において、我々が相手を本当に大切な存在としてかかわりあおうとしないならば、もうそこには「精神の死」という状況が入り込んでくるのではないだろうか。いじめとはそういうものの一つの現象ではないだろうか。あるいは、今日の子どもたちが、その友人との遊びよりもテレビゲームなどの閉ざされた世界においてより安心感や楽しみを覚える傾向があるとしたら、その中にもすでに「精神の死」は入っているかもしれない。また、人間同志の関係のみならず、自然や動物との関係においてもそれは入り込む余地がある。環境破壊ということもこのような脈絡で理解すべきではないだろうか。

また人間関係についても、単に同時代的なことだけではなく、過去との関係においてもやはりしかるべき関係を築かないと同じような問題が生じてくる。歴史を受けとめる感性とはこのようなものではないだろうか。

またこれについては意見のわかれるところであるが、人間がそれを越えたものとどのような関わるべきかということもこのことと関係してくるよう思われる。

このことから、「子どもと死」の問題をより広い角度から考察するためには、今日の子どもたちが置かれている「生」の姿（いじめをはじめとするさまざまな悪が取り巻く）をありのままに見つめて、よく検討することが必要不可欠であることは言うまでもないことである。しかしこの検討については今後の課題とすることにしたい。

- 注 (1) レギーネ・シントラー著（加藤善治、茂純子、上田哲世訳）『希望への教育 子どもとキリスト教』（日本基督教団出版局、1992年）。この第8章（pp.119～156）が「子どもと死」というテーマを扱っている。
- (2) 前掲書 pp.133～135 を参照のこと。
- (3) 前掲書 pp.119～120 を参照のこと。
- (4) 前掲書 pp.120～121 を参照のこと。
- (5) 前掲書 p.128。
- (6) 例えば、E・キューブラー・ロス著（川口正吉訳）『死ぬ瞬間の子供たち』（読売新聞社、1982年）。また、河合隼雄著『子どもの宇宙』（岩波新書、1987年）の特に、VI章「子どもと死」の部分（pp.155～178）を参照のこと。
- (7) 河合隼雄は前掲書（pp.175～178）においてこの作品を紹介している。
- (8) 広島の前爆については、例えば、丸木俊（え・文）『ひろしまのピカ』（1980年、小峰書店）などがある。
- (9) 『グリム童話全集Ⅰ』（全3巻）（高橋健二訳）、小学館、1958年、pp.370～385。
- (10) 前掲書、pp.242～245。
- (11) 野村玄著『昔話と文学』白水社、1993年、p.10。
- (12) 松岡亨子著『昔話を考える』日本エディタースクール出版部、1985年、p.1。
- (13) 前掲書 (1) p.143。
- (14) 同じ、p.141。
- (15) 同じ、p.142。
- (16) 平方浩介著『じいと山のコボたち』童心社、1989年。
- (17) 『アンデルセン童話全集Ⅱ』（全5巻）（高橋健二訳）、小学館、1962年 pp.186～191。
- (18) E・キューブラー・ロス著（伊藤ちぐさ訳）『天使のおともだち』日本教文社、1995年。
- (19) Regine Schindler, *Pele und das neue Leben*, Verlag Ernst Kaufmann, 1988。
- (20) 前掲書 (1)、p.137。() は、筆者による。
- (21) (20)に同じ。